

# 虚子記念文学館投句特選句・令和七年十二月

稲畑廣太郎 選

散る紅葉未練のこころ風に乗せ  
京都 西村やすし

記念樹も見事枯木に目立つ句碑  
新潟 安原 葉

星影を鎮めしポインセチアの緋  
兵庫 中村恵美

舞違へどつと沸きたる里神楽  
鳥取 前田 千

星ひとつ借りて聖樹となりにけり  
神奈川 金子三奈乃

まづ虚子の机拭き上げ年用意  
兵庫 藤井啓子

古暦最終章も厨にて  
兵庫 西村みどり

煤逃の土産奈良漬買うて来て  
大阪 立入宮子

冬晴や光集めるカテドラル  
大阪 深森明鶴

星型のライトをつける冬の本  
滋賀 太田 慈

(青少年)

# 入選句・令和七年十二月

冬帽子被りしままやガン病棟	大阪	山戸暁子	千鳥また平和な世界祈り鳴く	東京	高橋育夫
湯ざめせり星に心を奪はれて	大阪	須知香代子	少しづつ色を加へて式部の実	石川	辰巳昌彦
楽しことのみ書くつもりの日記買ふ	京都	前悦子	切られても切るも再生葱の青	奈良	山口廣世
期待する心は日記買ふ心	兵庫	池田文子	木の葉降る掃き寄せる間もなきほどに	三重	中島庸子
明日は大安吉日や日記買ふ	大阪	河辺さち子	蒼天へ見上ぐ冬木の汀子邸	大阪	谷本房子
海原に撓る釣り竿初寝覚	埼玉	小田毬藻	毛玉取りつい意地になる古セーター	大阪	若林友子
秋は身も心も合はぬ七分袖	千葉	鹿野川小舟	屋根裏の魑魅魍魎や虎落笛	奈良	堀田ますみ
散文が韻文となる時雨かな	大阪	押見げげげ	芦屋川日向ぼこりの鴉二羽	愛知	中野ひろみ
野の草を眠らせ宝山眠る	京都	杉森大介	初雪を告ぐる女将の弾む声	三重	池本準一
冬帝の日に抱かるごと我が俳磚	福島	濱名伸子	気がつけば咲き揃ひをり枇杷の花	奈良	堀田建夫
句仲間と俳磚たづぬ旅師走	福島	佐々木君江	芦屋浜千鳥の見ゆる沖の綺羅	兵庫	谷本逸歩
短日や寝ぐらへ急ぐ鳥の群れ	福島	市川瑞枝	それと聞き初めて気づく枇杷の花	大阪	ふじもと言果
冬桜満開といふ耐ゆる数	大阪	奥野千草	小さき浜残り芦屋の千鳥かな	兵庫	玉手のり子
生きてゐることの幸せ群千鳥	三重	松村咲子	骨董もちよとひやかして買ふ酢莖	大阪	北上美佐子
冬ざれの深まるばかり芦屋川	兵庫	平田恵	神の島巨樹かけめぐる虎落笛	兵庫	川村ひろみ
松葉蟹馳走になれる旅の待つ	兵庫	森岡喜恵子	潮引いて浜辺千鳥の天下なる	三重	前出美千子
朝光やずんと冬めく風の声	兵庫	前田容宏	冬木揺る木の葉吹かれてかさかさと	三重	前出公子
大修理佳境を迎へ冬紅葉	香川	藤田敦雄	石路の黄に深まる汀子師への思慕	兵庫	黒田千賀子
こつあると祖父の埋火赫多く	三重	吉川博子	冬日燦今日も虚子館賑やかに	兵庫	伊東伸子
凧や彩を沈める六甲山	大阪	林曜子	眠られぬ夜を囃して虎落笛	兵庫	宮本露子
細き息吹き埋火を燃えたゝす	大阪	田邊育子	数へ日に何も慌てて逝かずとも	兵庫	上岡あきら
汀子邸庭師に暫しの冬日向	大阪	山田佳音	狐火の消えて眼裏には消えず	兵庫	小柴智子
藪騒や虚子館に裸木の影	香川	三好ようこ	十二階船のデッキで虎落笛	兵庫	小川孝子
山眠る眠らぬ獣蠢ける	兵庫	槌橋眞美	人の世の波に乗りたく街師走	兵庫	高野さち
			底冷の駅に軋んで一車両	大阪	杉山千恵子

極月に追はるるやうに夢語る	兵庫	河野ひろみ	団栗の帽子ばかりを並べをり	兵庫	杉浦萌芽
冬の海瀬戸の入日の暮れ残り	兵庫	涌羅由美	チャペルへの道終の花匂ふ	大阪	高木音弥
指揮台をぐるりとポインセチアかな	香川	葛原由起	吊し柿揉めばずりと種子動く	奈良	堀ノ内和夫
洋館の出窓色足すポインセチア	大阪	西尾浩子	ハモニカの一番星となり冬至	兵庫	風待ラテ
冬の旅いびきのあちらこちらより	兵庫	高倉千都	打楽器のやうな空風吹く別れ	大阪	棕本望生
奥能登の荒磯宿打つ虎落笛	石川	白根寿子	朝歯医者昼は整形夜熱燭	兵庫	天下明太郎
寒さ急母骨折てふ一大事	大阪	多田羅紀子	新居にも古きお重や老の春	兵庫	松本 敬
俳論の尽きぬ二人の爛熱く	石川	辰巳葉流	着ぶくれて餅を買ふとか買はぬとか	三重	瀬川琴女
見透かされ立ち尽くすのみ冬の月	兵庫	深尾真理子	岬鼻に破れて残るや蒼鷹	愛知	小野 薫
年惜み館に通ひし日々惜む	香川	三宅久美子	俳磚の庭に日差しや小鳥来る	広島	藤谷知子
館小春虚子の書簡の読めずとも	京都	山崎貴子	灘の道たどれば椿の大樹かな	広島	下田あつ子
枯芝を掃きて庭師の歩の軽し	兵庫	辻 桂湖	白鷺や初雪の中佇みて	兵庫	高橋純子
一山のひかり集めて冬菜畑	兵庫	岸川佐江	納め句座今日も歩いて館に着く	兵庫	辻田あづき
伸び切つて大虚まさぐる枯木かな	鳥取	棕 誠一朗	追ふ視線低くなりたる冬の蝶	兵庫	日下富貴子
水音のなき邸の庭木の葉舞ふ	鳥取	棕 則子	寒紅や偽の血潮をよそほひぬ	兵庫	小林直美
解禁の漁の数多や師走くる	兵庫	永沢達明	芦屋川沖に日溜冬温し	兵庫	田中節夫
数へ日の俳磚に又語りかけ	兵庫	奥田好子	常ならぬ闇の張りつめ霜の声	兵庫	二瓶美奈子
着ぶくれの動いているは口ばかり	奈良	河村久美子	思索てふ静寂拡ぐる霜夜かな	兵庫	平尾孝子
湯豆腐やつきたる嘘を愛ほしむ	兵庫	足立朱麻	弥勒菩薩の指先なぞり去年今年	神奈川	斉藤苑子
時化あとの沖に冬日の千切れをり	東京	清水ぼっぱ	応へてはくれぬ空洞革手套	兵庫	岩永静代
奥伊勢のなほいじらしき冬木の芽	大阪	富永武司	冬帽に福耳隠し今朝の風	兵庫	道中義臣
スローライフおひとり様や枇杷の花	兵庫	岩水ひとみ	冬ざれて動くものなし芦屋川	兵庫	金田八江子
訪ふ人の手土産多く冬至来る	大阪	森重深鶴	遺されし冬帽三代目がかぶり	兵庫	山崎渺美
クリスマス客は吾のみの牛井屋	愛知	海神瑠珂	河豚を食し少し大人になる気分	兵庫	山口弘子
代替はる子供食堂トマト挽ぐ	富山	三河三可	がん治療ちよつとおしゃれな冬帽子	兵庫	三木雅子

何事もなくて夕べの河豚の味	兵庫	河合美恵子
皆は寝て独り茶の間の初笑	奈良	豚々舎休庵
つるりとむける冬至のゆで卵	兵庫	矢車星風
交差点師走の路辺迷い鳥	兵庫	恵島京子
後ろから突き上げらるる古暦	兵庫	恵島祥一朗
初雪や母の豚汁ほの甘く	愛媛	星月彩也華
冬の蠅こゑかけ合ひてゐるやうな	埼玉	吉田春代
聖夜の音静かな笑みの六地藏	神奈川	小林 心
国宝の二階に見ゆる冬薔薇	滋賀	近江堇花
重箱の四隅を拭ひ年用意	神奈川	平野孤舟
父を打つ子にやってくるクリスマス	熊本	貴田雄介
極月や水音立てて壁洗ふ	兵庫	キートスばんじょうし
年の暮油の匂ふベレー帽	静岡	いたまき芯
おでん酒壁の色紙は裕次郎	東京	宮村土々
寒柝の星ふるはせて近づけり	兵庫	太平楽太郎
湯気立てて独居の朝は鼓動せり	兵庫	伊集院秀樹
寒暁の梵鐘の音の硬さかな	和歌山	中島紀生
閉店の貼り紙はがれ冬の雨	兵庫	安橋興二郎
歳末セールゆつくりと人ながれ	神奈川	進藤剛至